
共感求ム。

imaginary

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

共感求ム。

【Nコード】

N7246V

【作者名】

imaginary

【あらすじ】

このエッセイは、作者の日常生活で発見した比較的どうでもいいことに対して共感を求める作品です。エッセイながら、かりそめの理論武装にひたむきな自我誇張をきっかり施し、フィクションとノンフィクションを織り交ぜた紙粘土のように薄い内容のエッセイになっています。

ちなみに、それぞれの話には何のつながりもないので、興味のある話から見てかまいません。

高揚感の話。（前書き）

マイページに何もないのが虚しすぎて書きました。

高揚感の話。

普段は気が弱く一般平均にくらべ多大な決断力の欠如を恥じる優柔不断な私だが、今回ばかりは始めに断言しておくしよう。このエッセイを拝見するのなら、連ね連ねた駄文の数々に目を通して貴重な時間をことごとくぶつ潰す覚悟と、どんな下らない妄想世界が展開されようと笑顔で受けとめる太平洋のような寛大な心を用意しなければならぬ。時は金なりである。

そして、上記の条件を配慮できたならば、いよいよ私の非現実的な現実へと読者様を誘うことになるが、このエッセイは読者様の清く澄んだ汚れのない瞳孔をはばからずも比較的不健全な色へと染めてしまう危険性が隠れている。アイマスクを用いる、画面を布で覆う、電源を切るなどして対策をとっていただきたい。

私は、とある県下のとある市内のとある区画内に腰を据える、繁盛そこそこなレストランでおよそ三ヶ月前からバイトにいそしむ高校生である。入学当時は勉学に励み、刀剣の代わりに鉛筆振るって学問という名の未開の地を切り開かんと考えたが、いつの間にか道を踏み外していたと気付いた時にはすでに遅く、私は指先すら見えない常闇に彷徨っていた。

世は、不景気の黒雲が背を伸ばし、競争社会で輪から弾かれた不

憫な人々をさらに不況の雨が吹きさらす過酷な時世である。私も何らかの傘下に加わってしようと思い、半ば社会体験の気分でのバイトを始めたのであるが、やはり善良な脳細胞の持ち主である私が生半可な心構えを潔しとしない。つまりは、身を粉にするのも惜しまない覚悟を持った素晴らしい従業員なのである。しかし、それにも関わらず全く仕事が入らないのは何ゆえであるか。

そして、今回の共感求む話しというのが、その両手で数え切れるほどこしか職場に出ていない私がアルバイトで感じたことである。しかし、もちろん他の従業員が注文だ、片付けだ、勘定だと慌しい空気を取り巻いているなかで、ぬるま湯に浸かったように顔をほころばせながら何か感じることは出来ない。その感覚は突然に芽生えたのである。

私はホールスタッフと言って、お客様の注文から勘定までをお世話する手抜かりの許されない役職を任されているが、その仕事の内に冷水を運ぶという作業があり、それはお客様のグラスが空になるのを卑猥な視線で見計らってからボトルを片手に水のおかわりを注いでいくという地味だが大切な仕事である。その仕事をするために、私がポットに水を補給している時のことだった。

始めの方はポットに入った水が底で低い音を立てるが、水かさが上昇していくうちに音が高くなっていく現象というものがある。擬音語を駆使して伝えるならば。

いぽぽぽぽこここここくくくきききき……。

となる。少なくとも私の中ではこうなる。こうなってしまう。

残念ながら私のしがない文才ではこれ以上の表現は難を極める。

ぜひとも、底の深い容器に水を入れてみて欲しい、するとこの低音から高音になっていく感覚が分かるはずである。しかし、水を注ぎながら懸命に耳を澄ませる痛々しい姿を家族や友人に目撃されることだけはないように細心の注意を払っていただきたい。

ところで、その音が何なのかということに話を戻す。

私は、この音を聴きながら少なからず高揚感を覚えた。音階が上へ上へとのぼり詰める音は、私の身体に悪霊のごとく取りついた疲労を緩和させた。雑巾のように絞られていた心が解放されて緩みを取り戻すような感じである。

見えない何かが私を晴れ舞台へ押し上げていくような高揚感。ラツパを吹く幼児の天使が私を賞賛し頭上を飛びまわり、天国からの光りが私の足元だけに降りしきる。懸命な仕事人へ成り済ますため、表面は無表情でしっかりコーティング、内面では陰湿な笑みを浮かべていた。

何も読者の皆様にポットに水を入れながら高揚感を覚え、兼ねて私に共感しろなどというおこがましいことは言わない。ただ、何かにのぼり詰める音というのがいかに気分をくすぐるかということに、共感願いたい。そう思った所存である。

共感求ム。

風呂場の話。(前書き)

前回は文が硬すぎたと思いまして、少し柔らかくした……つもりです。

風呂場の話。

赤子は生まれる場所を選べないと言うが、真にその通りである。

私の自宅には玄関を上がり左方へ曲がると、トイレと風呂場に繋がる通路がある。ただでさえ狭く苦しい通路に洗濯機と乾燥機が偉そうに腰を据えている。しかも、洗えば逆に汚れがつくと家族に酷評を受ける由緒ある年代物であるため、洗面台の横でごうごうとけたたましい音を立てて、いささか煩わしい。およそ褒める所が一つもない洗濯機である。

しかし、そんな洗濯機すら右に出るのを許さない空間がその通路の先にある、それは風呂場であつた。

私は中学生の頃から、北方の広野から南国の島国まで「黒板消しのプロ」として名を馳せていた。私の手中に収められた黒板消しはたちまち虹色に輝き、持ち味を遥かに凌駕した持ち味をしたたせた。私の手で消された光沢を放つ黒板を見て数々の教師がむせび泣いたに違いない。そして誰もが私が日直になる日を切に待ちわびた。しかし、私が消した黒板も完璧ではなかった。なぜなら中学生であつた当時の私には黒板の最上部まで届く身長がなかったからだ。

だから私は黒板の神に願つた。私の身長を伸ばしてくれと。すると、驚くことに私の身長は竹のように伸び始め、ついには黒板の四隅の汚れすら見落とさない長身の男へと変貌した。そして高校生になつてさらに賞賛されたことは言うまでもない。

しかし、ここで話しは戻る。中学から高校にかけて急激な二次成長を遂げた私だが、そのせいで風呂場の浴槽が狭く感じるようになった。いや、感じるなんていうものではない、中学の頃は足を伸ば

して至福の声を響かせていたものだが、今となつては膝を折り曲げなければ肩まで浸かれない。何と腹立たしいことか。風呂場の神よ、私の身長を縮めたまえ。

しかし、そう簡単に身長が上がったり下がったりするビツクリ人間にはなるはずもなく、私は嘆きの涙を浴槽内にしたたらせていた。涙がこぼれないように上を向いて歩こうとよくいうものだから、歩いてないけど浴槽に浸かっている時は上を向くときが多くなった気がする。そこで感じたことが今回の共感求む話である。

上を向けば当たり前に天井があるのだが、そこには水蒸気が天井に吸い付いて水滴を作っていた。それだけで鍾乳洞のような雰囲気すら出ている。この現象は誰でも見たことがあるはずである。

そして、私はそれを見た瞬間に無性に落としたくなった。だから浴槽の水を手ですくって天井に投げたりする。しかし、そうすると水滴が落ちてきて下にいる私は逆襲を受けるはめになるのだが。とにかく、落としたくなつたのである。前置きが長かつたために、読者のため息が夏風にのってやってきそくなほど下らない内容であるが、それだけである。深い意味はない。

共感求ム。

無軌道台風の話

私は小学生の頃、近所の住人から分け隔てなく『無軌道台風』と蔑まされていた。理由を述べるなら、それは名の通りアトラダムに各地へ赴いては啞然必須な事件を立て続けに起こす、自分自身でさえ理解しかねない少年だったからである。逆に言えば少年期の私を理解してくれる人がいるなら私はその人が理解できない。

どんな所業を働かせたかというと、たとえば意味もなく高所から飛び降りて保護者一同を一驚させたり、フェンスの手すりに跳び乗って平均台感覚で遊んだり、華やかなガーデニングが施された人様の庭の花を残酷に摘み取って川に流したりである。

その悪しき所業の数々のほとんどに意味などなかった。良く言えば好奇心旺盛な少年であるが、悪く言えば馬鹿で阿呆で他人の迷惑をかえりみず、陰湿を極め将来が危ぶまれ、下種で悪趣味で面白みのない少年であった。せめてその好奇心を幼少のころから勉強やスポーツなどに向けていれば、また違った人生を歩んでいたのだろうが、背に腹はかえられない。私は私の過去を負って人生をひた歩くほかないのである。

そのせいか、私は酷く非難された。祝いの席に置いても邪悪な才一ラをまとうている私には誰一人として声を掛けるものはいなかった。

しかし、そんな大人達から煙たがれていた私でも友達はいた。しかし、健全な生活をおくる彼らにとって私が煙草のヤニのごとく悪影響を及ぼし、愛すべき友人を私色に染めてしまったことは否めな

い。

たとえば、私は『冒険』というものが大好きであったので、ある日私はこう言ったことがある。

「冒険するには勇気が必要。みんなでその修行をしよう！」

その修行は、近所の川辺や自宅付近の給水等などで行われることになった。みんな同年齢であるが、仕切る人間が必要だと結論が出たため、言い出しつぺの私が「師匠」として名を残すこととなった。

修行は勇気を付けるという意向で行われたが、実際は川べりの崖を登ったり、橋の手すりを渡ったりと、レスキュー隊を目指してない限り使用用途のつかめない無謀なことばかりしていた。そこから色々な事件や問題が発生したのだが、それはまた別の機会に執筆することにする。

そうして、私は小学校時代を見事に易々と棒に振ったのだが、現在でもその不毛な努力を耐え忍ぶ精神力を持ち合わせているのは「無軌道台風」の異名を持ち合わせていた当時の私がいたからだと推測する。

不毛な努力を耐え忍ぶ精神力など要らないのでは？ という質問は受けつけない。私の自尊心への冒涇である。

辛酸を舐めて舐めて舐めまくり、もはやがぶ飲みまでした私の幼少時代に同感できる人物はいないものかと切に思っている。

共感求ム。

エレベーターの話。(前書き)

暇だったので、二話連続です(笑)

暑さのせいからか、一話に比べると文章の質が落ちていますが、どうでもいいをテーマにしているので、ご了承ください。

エレベーターの話。

この話しは私がまだ犬の事を「わんわん」と呼んでいたほど幼少の頃の記憶で書かれている。頭の片隅に断片的に残っていたもので、もはや夢の出来事なのか現実の出来事なのか判断しかねるほどだ。その上で見ていただきたい。

私の両親は共働きであるため、仕事の長期休みがかぶらない限りは滅多にないことだが、私はその時、家族と海外旅行に来ていた。海外と言っても私の住む県からは東京に行くより近場の韓国である。韓国には親族がいたため、旅行中はその親族のおばさんに面倒を見てもらったことになった。

家族はおばさんの住んでいるマンションに泊めてもらうことになった。確かトイレで用をたした後にトイレトペーパーと一緒に流して便器を詰まらせたのを覚えている。韓国の一部のトイレでは拭いたトイレトペーパーと一緒に流すのではなく、備え付けのゴミ箱に捨てるのだとか。

しかし、本当のことを言うと、その記憶も定かではない。もしも韓国のトイレにそういった仕来りがなければ、私のこの話は夢の事となってしまう。それほど記憶が曖昧なのである。もっと言ってしまう、おばさんの家はマンションでなかったかもしれない。しかし、なぜマンションと書いたのかというと、それには訳がある。私はおばさんの自宅でエレベーターに乗ったからだ。

今でも、その事だけは鮮明と脳裏に映し出される。

確か、近場に構えていたラーメン屋に家族とおばさんとで食べに

行き、私は母から小皿に移された麺を愛嬌を振りまきながら、おぼつかない箸使いで食べていた。さすがにこの時は誰も『無軌道台風』へと変貌を遂げる私の未来を予測していなかったはずである。

ラーメンを食べ終わると、多分だがマンションの近くに公園か何かがあったのだろう。私は「遊びたい」といつて駆け出したのである。母は早く帰りなさいねと微笑んでおばさんと一緒に部屋へ戻った。すると私はすぐに寂しくなって、母のあとを追ったのだが、母はもうエレベーターに乗って上がっていた。私も何となくエレベーターの使い方は心得ていたため、上へ行くボタンを押した。すると、しばらくしてドアが開き、私は中に入った。しかし、困ったことにボタンがたくさんあって、どれを押せばいいのか分からなくなり、ただただとしているうちに扉は自動で閉まってしまった。

すでに泣き顔になっていたが、とりあえずボタンを押せば何とかなると思い私は適当にボタンを押した。

ここからが、奇妙な体験である。

すでに一階であるはずなのにエレベーターは下に進み、扉が開いたかと思えば、そこには真っ暗闇が広がっていた。確かだが、歯車のようなものを見た気もする。何だか闇の向こうで何かがうごめくような。このまま私の現実が終わってしまうかのような。もう、母のところには戻れないかのような、そんな感覚が子供ながらに湧いてきた。

困惑して泣き喚いた私だが、数秒後にエレベーターは動き出し、上がっていった。そして、扉が開くと母が立っていた。「あら」などと言って、泣いている私を抱きかかえた母は、何かを察したように頭を撫でてくれた。

あの真つ暗闇はなんなのだろうか。知る人はいないのか。それとも夢なのか。

どちらにしろ、私には確かめるすべがない。多分、無謀だろうが、言っておく。

共感求ム。

エレベーターの話。(後書き)

誰か知っている人いますかね……。

夏休みの話

いきなりであるが、皆さん落ち着いて聞いて欲しい。お茶やコーヒーなど吹き出す要素があるものを口に含んでいる読者は早々に飲み込んでいただきたい。ありとあらゆる抗議や反感の目を耐え忍ぶ覚悟で言わせてもらう。私は夏休みなど要らない。

「夏休み」というのはその名に丁寧にも「休み」と銘打つてあるにも関わらず、人々は一向に休もうとしない許すまじ期間である。無酸素運動を日中の限り極め尽くし、海だ山だと全国各地を駆け回る。それは完全燃焼を遂げる始業式まで衰えを知らず、先生方がわざわざ宿題というブレーキを用意してくれているのも無視して学生達は荒野駆け抜ける。

夏休みは何かしら観光客というものが多く目に付き、その中にはご当地グルメなるものを食しにわざわざ県外から来訪する人々もいるわけで、ここ数日の間に全くバイトに参加していなかった私はいきなり急増した仕事に唖然とするほかなかった。

そうすると、本来なら夏休みは休むものだと思固める私の身体は日に日にやつれていき、食欲も失い、蝉の鳴き声に耳をふさぎ、バイトの時間までパソコンをするか漫画を読むかのどちらかになった。

しかしある日、せめて夏を堪能しようと思私は力キ氷を食べようと思った。うちわを用意して、迷惑だからと封印していた風鈴も一時的に掛けて、晴天とは言わないが曇り空の下でベランダに椅子を置き、腰掛けた。

「今日風強いし、風鈴うるさいよ」

弟がそう言つて、ベランダの扉を閉めた。何と薄情な弟なんだ、
と思ひながらも私は夏を楽しむことにした。

しかし、五分後ぐらいに突如雨が降りだした。しかも横吹きだ
から私にもバシバシあたる。私は舌打ちしながらも早々と片付けた。
しかし、問題はそこで起こる。

弟のいたずらなのか、ベランダの鍵が閉まっていた。背中に大粒
の雨を受けながら私は窓を叩いた。しかし、いくら弟の名を呼んで
もやってこない。風鈴はもはや学校の災害時になる警報音のような
けたたましい音をたて、カキ氷の容器にはブルーハワイ色の雨水が
溜まりはじめている。

ただ心の癒しに夏を堪能した健全なる高校生に対してこの仕打ち
は何だ。全部夏のせいだ。夏が悪い。夏休みなんて要らないぞ。奇
奇怪な生物が飽和する塩水に浸かって何が楽しいのか、肉体疲労
しか伴わないうえに節足動物の住処に立ち入って何が面白いんだか、
結局は宿題に追われる日々が待っているじゃないか、気休めにもな
らない。だいたいブルーハワイってなんだ！ ただの砂糖水に着色
料と香料を混ぜた不健康汁ではないか！ それを擦った氷に掛けて
食べて何になる！

私はこの出来事で夏の夏たる由縁を全て否定した。

のちに「ごめん、トイレ行つてた」と、弟が窓を開けたが、私は
返事もせずに川から上がった河童のような姿で部屋に戻った。

もう嫌だ。夏なんて要らない。冬眠もとい夏眠してやる。だれも
私を起こすな。私が次に身体を動かすのは秋になってからだ。そう

決意してベッドに潜り込んだ。これが、夏休みなど要らないなどと非国民もいい所な発言をした経緯である。

しかし、結局のところその日のバイトにも行き、くたくたになって帰宅した。

私は夏休みを無意義に過ごすこととなるだろう。

共感求ム。

夏休みの話。（後書き）

まあ、実際は好きですけどね。夏休み。

みつちゃんの話

話を進めるに当って言うておかなければならない。みつちゃんとは仮の名前である。なぜならば、この話は私が小学一年生の頃の話で記憶が定かではないからであり、今後展開される内容も曖昧な部分にはフィクションを用いている。

みつちゃんはクラスの中で一番身長が小さい女の子であった。しかし、身長とは裏腹に好奇心旺盛で昼休みになると男の子たちと混じって遊ぶような元気な女の子でもあった。これは、そんなみつちゃんのお話である。

私とみつちゃんはそこそ仲良しであった。

私は現在、どちらかというなら自宅愛好家で外で遊ぶことはあまりないが、小学校のころは「無軌道台風」と異名を持つほどの問題児であった。しかし、案外にも学校ではおとなしく、ノートに落書きしたり、折り紙をおったり、オリジナルのカードゲームを作ったり遊んだりしていた。

みつちゃんは多分スポーツとか身体を動かすのが得意な子だったが、私といるときは一緒に折り紙をおったりしてくれていた。先生に「また、落書きして、みんな真似しちゃ駄目よ」などと言われて馬鹿にすらされていた私の落書きを唯一褒めてくれて、どんな下らないゲームでも笑顔で付き合ってくれた。

恋愛的な意味はなかったと思うが、私はみつちゃんの事が大好きであった。

そして、ある日の掃除時間のことである。私は廊下掃除を任されていたが、どうにもやる気がでずに壁にのたれて座り、ほうきを床に置いて教室の中を覗きこんでいた。すると、教室からみっちゃんが出てきて私のもとに駆け寄った。

「掃除しないの？」

みっちゃんは真面目で素直だったから、容易にうなづくこともできずに「ほうきが重くて持ち上がらない」とか、適当に言った。そうして、必死に持ち上げるふりをしてほうきを床から少しだけ上げた。

みっちゃんは私の冗談に笑ってくれた。そして、ちょっとだけ持ち上げたほうきの上をぴょん、と跳んだ。

「もうちょっと高くても跳べるよ」

得意げに言うので、私は言うとおりにほうきをもう少し持ち上げた。しかし、みっちゃんはそれも軽々と跳び越えてしまう。

「もっと、もっと」

みっちゃんが手を叩いて私を急かすので、私はとびつきり持ち上げてみせた。

「どうだ。跳べないだろ」

ほうきの高さはみっちゃんの腰あたりまで高くなった。すると、みっちゃんはまた笑い出して「重くて持ち上がらないんじゃないかったの？」と腹を抱えた。何だか私ははめられたような気が

して、苦笑いでうつむくしかなかった。

「分かったよ。掃除するよ」

観念して立ち上がろうとしたが、それをみっちゃんが止めた。

「あ、待つて。最後に挑戦させて」

そう言うので、私は膝の辺りまで高さを落とし、最後の挑戦を受け入れた。

みっちゃんは思いつきり助走をつけて、勢いよくジャンプした。しかし、その時である。私はほうきの高さを上げた。軽い悪戯のもりだったが、それは危険なことだった。みっちゃんはほうきが足に掛かり、廊下に突っ伏すように倒れた。

一瞬のことだったので、私は啞然となって息を呑んだ。しかも、こけたみっちゃんは短いスカートを履いていて、それがめくれてパンツが見えていた。いやらしい意味とかではなくて、女の子に醜態をさらさせたというのは、小学生の私でも分かった。私はみっちゃんに酷いことをしてしまったのである。

みっちゃんは起き上がると、スカートのめくれをなおしながら泣いた。声を必死に押さえようとあごを引いて、ひしひしと涙を流した。廊下を通っていく人達の視線が痛かった。

しばらくして事態に気付いた先生が教室から出て来て、泣いている事情を訊いてきた。しかし、私は罪悪感から言葉が詰まり、「みっちゃんがこけた」としか言えなかった。先生は「おでこ打ったの？保健室いこうか？」などとみっちゃんを宥めてから、みっちゃん

んを抱っこして保健室へ向かった。

私は連れて行かれるみつちゃんから目を離さなかった。すると、先生に抱っこされたみつちゃんは私の視線に気付き、泣き顔で無理やり笑顔をつくった。「君のせいじゃないよ」とでも言ってるような笑顔である。

それからみつちゃんと仲が悪くなることはなく、何事もなかったように今までどおりに過ごしたが、それから二年生になり、クラス替えて離れ離れになって、二年生の冬で私は引越し別の学校に転校した。

私は今でもあの時の笑顔を忘れることができない。もうかなりの時間が経って一人の女の子に恥をかかせたという罪悪感が消えてしまったが、未だに残る後悔が二つある。

みつちゃんが私を気遣って「つまづいて転んだ」と先生に嘘を吐いたのは友達から聞いた。だからこそ、自分のせいだと正直に言わなかったことを後悔している。

なぜあの時、正直に「僕がやりました」と言わずに「みつちゃんがこけた」としか言わなかったのか。それが一つ目の後悔。

そして、私はまだみつちゃんに謝ってない。転校するまでの間、「ごめん」の一言も口に出さなかったのである。今考えただけでもその時の私に腹が立ってしまう。それが二つ目の後悔である。

しかし、もしかしたら、またいつか再開することがあるかもしれない。きつと雰囲気も変わっているし、私を覚えてくれているとも思えない。もちろんそんなドラマのような展開もあり期待されな

い。しかし、私はこう思う。

……それでも。謝ろう。

共感求ム。

秘密基地の話

私が『無軌道台風』として巷を騒がせていたと同時期、私は『師匠』とも呼ばれていた。それは、冒険が大好きだった当時の私が友達に「冒険のためには勇気が必要。そのための修行をしよう」と持ちかけたのが発端である。

ここで、各修行場を述べる。一つ目は私の自宅付近にかまえている給水等。二つ目は横断道路の途上に位置する橋の下。三つ目は川べりの雑草地帯。四つ目は林の中にそびえる無人小屋である。

今回は無人小屋の話を進めることにする。

横断道路を途中で左にそれ、細い脇道を進んで行くと右手に小さな区画内で雑木林がある。その雑木林の中に入り込むと、小さな区画と思っていたのと裏腹に、意外にも奥行きがあり、奥へ奥へと進んで行くと開けた道が姿を現す。その道をまた少し歩くと無人小屋がたたずんでいる。

初めは雑木林探検をしていたのだが、無人小屋に気付いたときは思わず「これだ！」と手を打っていた。その時は友達のダイ君と二人で探検していたのだが、ダイ君のほうも目を輝かせていた。

「ここを秘密基地にしよう！」

二人は同じ意見だった。前々から秘密基地を作りたいと考えていたので、無人小屋との出会いは絶好の機会となった。

無人小屋は、廃墟同然でいつ崩れ落ちてもおかしくないような小屋だったが、戸締りはされていた。入り口は鋼鉄の扉だし、入れるような穴は開いていないし、窓も全て閉まっていた。しかし、小さな穴は至る所に開いていたので、私達は交互にその穴から部屋の中を確認した。

小屋というよりは木造の倉庫のようなものであった。カレージのように工具が壁に掛けられて、床には分解された扇風機やテレビなどがほこりをかぶり置いてある。

しかし、入れないのなら意味はない。私とダイ君は小屋の前で唸るばかりであった。しかし、突然にダイ君がひらめいた。

「壁一枚でできてるんだから、壁の下に穴を掘ってそこをくぐれば良いんじゃない？」

しかし、壁は地面の中にまで入り込んでいて、その方法は不毛な努力に終わった。

ダイ君が必死に穴掘り作業を続けているなか、私は小屋の壁に取り付けられた排水管をつたって屋根に登った。少しばかりダイ君を驚かせようと屋根からダイ君を見下ろして「ダイ君」と呼んだ。すると、こちらを向いたダイ君は歓声の声を上げて「俺も登る」と言った。

しばらくしてダイ君も屋根に登ってきて、「な、壁のぼりの修行役にたつてでしょ？」「まあ、確かに」「これからは師匠の修行には従いたまえ」「了解です」などと言い合い、屋根で遊んだ。

しかし、私がよそ見をしていると、がこん、と大きな音が耳に入

つてきた。何かと振り返るとダイ君が屋根にはまっていた。屋根の板が抜けて、ダイ君がそこにはまっていたのである。

「たすけて……！」

ダイ君が手を伸ばすので、私は駆け寄ってダイ君を引き上げた。すると、ダイ君がはさまっていた穴からは幸運にもはしごが見えていた。

「危ないよ。落ちたら死ぬってば」

「師匠をなめるんじゃない」

心配するダイ君を背中に私はその穴からはしごを伝って下りた。

「すげえ！ 下りれた！ 中すげえ！ 臭いけど」

私が興奮していると「俺も行きたい」とダイ君がいったので、私は窓の鍵を開けた。屋根から下りたダイ君もそこから中に入った。

こうして、二人が見つけた秘密基地は他のメンバーである『しおっち』と『たいし』にも伝えられることになり、これからは鍵を開けた窓から出入りすることになった。以後、秘密基地の取り壊しが行われるまでこの話は続く。

私達は他の誰がつくった秘密基地より自分達の基地が一番優れていると信じていたし、多分それは秘密基地を持っていた全員が思うことではないかと思う。

共感求ム。

疑似初恋の話

読者の皆様、疑似初恋というものをしたことがあるだろうか。本物に似てまぎらわしい恋のことであるが、それは単なる勘違いであり、疑似初恋は少し違う。まず初恋でなければ患うことはないし、誰もに降り掛かる恋というわけでもない。

簡略して言えば、周りにそそのかされ、はやし立てられ、いい気にされたあげくに、対象の異性に好意的な感情を向けられた場合のみ発動する恋なのである。もっと簡単に言うのであれば、好きでもないくせにTPOで恋をしているような気分になることである。

私は小学校二年生の冬に親の仕事の都合上で転校しているが、これは転校する年、つまりは私が小学二年生の頃の話である。

私はいよいよ「無軌道台風」としての先天的能力を次々と覚醒させていたが、裏腹に学校ではそれはもう大人しく生活していた。そんな私だが、残念なことにろくな友達がいなかった。落書きばかりしていたから、どこか陰湿なイメージが出来上がっていたのかもしれない。

だから私はどのクラスの子供でも出入り自由のフリールームと呼ばれる教室で一年の頃の友達であるみっちゃんとか上田君とかと遊んでいた。パズルゲームやすごろくなどを置いてあるため、外で遊ぶよりも私は楽しかった。

しかし、そんなシメジのようにクラスで息を潜める私にも、多少の男子や日和ちゃんという友達はいた。日和ちゃんは私のことを「

ちくわ丸」と呼んでいた。理由は定かではないが、私の唇がたこのようにちくわ型だったからではないかと考える。日和ちゃんはいつも赤いハンカチをポケットに忍ばせて「私が作っただよ」と自慢気に話す女の子であった。しかし、今ならば言える。手作りハンカチに企業のロゴマークはないですよ、と。

しかし、そんな日和ちゃんの嘘も社会に浸れば小さく霞むもので、今となっては怒る気にもなるはずないし、逆に少し笑ってしまう内容でもある。

日和ちゃんは私と同じで絵を描くのが好きな子であった。たまたま席替えて隣り同士になったときは、毎時間のごとく絵を見せあいつこしていたものである。

そんなある日、私は珍しくクラスの男子達と昼休みに会話を繰り広げていた。内容はよくある「クラスの中で誰が好きか」であり、私は半強制的に負けたら吐露しなくてはならないゲームへといざなわれていた。何たる悪友か。

ジャンケンをして、負けたら好きな人を暴露して、皆から冷やかされた後に、またジャンケンをする。また同じ人に当れば二番目に好きな人を答える。そんなことの繰り返しを昼休みが終わるまで続けていく。しかし、それは私にとって苦痛の時間であり、負けたら全力で教室から逃げ出そうとすら思っていた。なぜなら、私には好きな人がいなかったからである。

「あ、負けた」「俺は美香ちゃんが好き」「まじかよ」「次ぎ行くぞ」「ジャンケン……」「くそ、やられちまった」「誰なんだよ」「俺も美香ちゃんだよ」「美香人気だな」「あ、お前家が近所なんだっけ」「うん」「まじか、じゃあ次ぎ行くぞ」「ジャンケン……」

そんなこんなで、結局私は五・六回目に見事に負けた。

「だれだれ？」

「すげー、気になる」

「っていうか、好きな人いるの？」

私は陰でひっそりとゲームに参加していただけなのに、負けた瞬間スポットライトを浴びせられたごとく質問攻めにあつた。しかし、それは少なからず私に興味を示してくれているということであり、私は期待を裏切ることができずにうなずいた。もはや退路は絶たれたも同然。

「意外だなあ、誰なの？」

「教えて教えて」

「まさか、美香ちゃんか！」

私が黙って口を閉ざしてしまったので、そこから私の好きな人当てゲームへと勝手に話題が切り替わり「豊芽さん？」「藍咲さん？」「三島ちゃん？」「玲乃ちゃん？」と次々と解答を繰り返していった。しかし、彼らにとっては虚空に石を投げるようなもので、解答した手応えというものはなかったはずである。なぜならその好きな人当てゲームには的が存在しないからであり、それは私に好きな人がいないからである。

しかし、私はすぐに気付く。このまま行けば三分も掛からずにク

ラスの女子全員の名前が拳がっってしまう。そうすれば、強制的に最後に言い残った女子が私の好きな人として悪友共の頭に記憶されてしまうのである。それだけは勘弁であった。

ならばせめて嫌いではない人を言おう。と思って私はなおも解答を続ける悪友達に言い放った。

「ヒント、あかずきん」

これは、彼女がいつも赤のハンカチを持っていたからであり、その時の私には最大の濁し回答であった。しかし、一人の男子が「日和ちゃんだ」と気付き、必死に濁した回答も、波の前の泥壁のようにあっけなく崩れてしまった。

「変わってるな。日和ちゃんって」

「いやいや、でも確かに二人は仲良いよ。話してるのよく見かけるもん」

「もしかして両想い？」

「結婚しなよ結婚」

「それいいね」

阿呆か。青っぱな垂らした小学生が結婚なんて言うんじゃない。そそのかしたって無駄だ。大体彼女が私の事を好きはずがない。いや、待てよ。彼女は結構私にやさしくしてくれているし、もしかしたら気が合うのかも。いやいや、私はそんな中身の無い風船のような軽い男じゃないだろう。彼女だってそんな軽がる気向きが変わ

る磁石のような女ではないはずだ。

悪友達をほったらかして自己の世界に入り込み、葛藤に葛藤を重ねたすえに出た答えがこれだった。

そうだ、多分。俺は前から日和ちゃんが好きだったんだ！ そうに違いない！

しかし、皆さんはお分かりであろう。これが悪友共に無理やり思考を転換させられた結果だという事を。恋というものを知らなかった私にとって、これが疑似初恋になり、もちろん日和ちゃんとこれ以上の懇ろになるはずもなく、私は転校への一途を辿っていったのである。

今思えば、これが『絶対恋愛吟味主義者』への一歩目だったのかもしれない。

さあ、皆様。こんな経験ないでしょうか。出来ればあって欲しくない。

共感求ム。

TKDの話。(前書き)

TKG(タマゴかけご飯)みたいですね(笑)

TZDの話。

私は、去年の春に高校へ進学した。学校は私の住む町から三駅離れた所にあり、私は毎日のように電車通学を強いられる身となった。私には通学を共にする友が三人いるが、そのメンバー内では『立ち安泰』という暗黙の了解が成立している。つまりは、セールス前で乱れあう主婦達のように席を奪い合うのではなく、せめて良い立ち位置を取得しようという考えである。

ひとたび座れば、ゆりかごのような心地よい車体の揺れに眠気を誘われるものだが、立っていればそういうこともなく、必然的に会話が飛び交うことになる。この話は、その『立ち安泰』において私達が結末に結末を固めたTZD計画の話である。

TZD計画。まずはそれが何なのかを説く。簡単に言えば、Tは『テストの』、Zは『上位』、Dは『独占組』となる。

話を始めるにあたって、まずは『テストの上位独占組』のメンバーの紹介をしなくてはならない。

まずは私である。成績優秀、運動神経抜群、文武両道、博学多識、天地あまねく至高の貴公子。四千年に一度の逸材とされた不況の時世に虹を架ける万人が夢想した近代戦士である。と記したいのは山々であるが、実際はただの高校生である。

次に紹介するのは『トレイン』である。もちろん本名ではない。これは彼が愛してやまないフリースであるらしく、ゲームのキャラなどは全て『トレイン』で統一している。まさに全世界の『トレイン』を司るべき人物なのである。ちなみに十人の女性がいたとした

ら十人がうなずく美男子である。成績も優秀。

次に紹介するのは『たつくん』である。もちろん本名ではない。彼は隠れ毒舌と陰で危惧され、とくにその先天からの能力は数々のコンプレックスを容赦なく打ちのめし、不特定多数の男女に辛酸の涙を湧かせたという。

最後に紹介するのは『とうし』である。これは本名である。なぜなら、彼にはこれ以外の呼び名がなく、新しく作ろうにも思い浮かばない。女でも男でも、白髪が目立つおじいちゃんでも、あおっぱなたらし子供でも、誰一人として隔たりなく『とうし』と呼ぶのである。

そんな彼らと共に『テストの上位独占組』はある日の帰りに結成した。

「今度の期末テストで、クラスの奴らをあつと言わせようぜ」

それを言い出したのは、トレインである。彼はクラスでもトップで拮抗する成績優秀な男子だが、それに比べ何とも言えない成績層をただよっていた私達を見かねてそう言ったのであろう。

しかし、皆様。ここで、言っておこう。私達は『成績を上げる心構え』ではなく、『成績を上げる心構えを持つ心構え』が必要であり、もつと言えは『成績を上げる心構えを持つ心構えを持つ心構えを持つ心構え』が必要だったのである。なぜならば、私達は毎回の電車通学で「今度のテストは面白くなるぞ」「寝ずに勉強しろ」「分からない所は電話でやりとりな」「トレインに訊けば早いわ」「燃えてきたぜ」とかお互いがお互いの言葉で刺激しあって、気分を高揚させたのは良いものの、それは全てうわごとであり、私達には

成績を上げる心構えは愚か成績を上げる心構えを持つ心構えすら持っていないかったのである。つまりは勉強には微塵も興味なかったのである。

帰宅し、テレビを見て、晩飯を食べ、風呂に入って、歯磨きして、布団に入る。それを期末テストまで繰り返し、結局のところ成績は全く変わらないものとなった。

協力しあえば出来ないことはない。という正論を手繰り寄せて我のものとし実行したまではいいが、どんなことにも例外があるというのを忘れてはいけない。私達の場合は「赤信号皆で渡れば怖くない」へと変化してしまったのである。

共感求ム。

絶対恋愛吟味主義者の話。

さてさて、皆様。絶対恋愛吟味主義者というのをご存知でしょうか。といっても知るはずはない。なぜならば、それは私が自身につけた異名であり、この世に例を見ないめずらしいものだからである。では、絶対恋愛吟味主義者とは何か。

それは、私が中学二年生の頃に起こった『第二次疑似初恋』を機にすること。綿密に述べればまた少し違ったものになるが、所憚らず簡略化して読者様に伝えるのならば、失恋をしたのである。

私は思いのほか悩んでいた。恋愛とは何か。男女とは何か。運命とは何か。

私の目の前にはうつとおしいと思うほど赤外線のように張り巡らされた運命の赤い糸が乱雑しているというのに、思いふけて自分の小指を眺めてみるも赤い糸は見当たらない。それどころか私の小指には番犬用の鎖が一寸先の常闇へ繋がっているように見えた。

私は数ヶ月に渡って頭を抱え込み、あるときは鬱になり、あるときは横暴になり、あるときは無責任になり、そしてやっとたどり着いたのである。私が求めていた男女のあるべき姿。今となって思えばあの忍びがたい月日も私が絶対恋愛吟味主義者へと覚醒する期間だと言える。

名の通りであるが、私は恋愛を吟味することを決めた。ゆえに『まだアナタの事をよく知らないから、とりあえず付き合ってみて気が合ったら続けていきましょ』などと睦言を交わす輩は却下である。

何が「とりあえず」だ。近代社会における気の緩みであるのか、様々な電子機器による電波的余波を頭に受けたのか。どちらにしろ軽すぎではないか。風船みたいではないか。まるで即席ラーメンだ。嘆かわしい。

ゆえに『ぎやる』であるとかそう言った人間は思う存分嫌いである。もちろんのこと金髪で露出の多い服装をしている若者の全ての性格が乱れているとは思っていない。広い世界であるから、三日三晩探し回れば、もしかすると心の優しい『ぎやる』も見つかるかもしれない。しかし、私にはそもそも、そういった方々の思考がうなぎのように掴めないのである。

もつと突き詰めた例を挙げるのであれば、私は友達との恋愛話もあまり好きではない。といっても、これは最近になって思い始めたことであるが、すぐに下品な話題に逸れたり、そこにPCがあればすぐに猥褻なサイトを検索して男共で興奮したり、そういった事が目の前で行われると私は怒りに駆られる。別にその男友達に対して怒るのではない、なぜならば男とはそうゆう生き物であると理解しているからであり、私が怒っているのはそのような状況に陥った自分への不甲斐なさからである。

ゆえに、そのような話が展開されると私は孤立しがちである。別に仲間に入れて欲しいとは微塵も思っていないが、友達としての付き合いがあるので少しは発言を試みたりもする。

私は一途でありたいし、そうでなければ舌を噛み千切ってナイル川へ飛び込んでやる覚悟である。しかも単なる一途では私の情熱が治まらない。私は至高の一途男になりたいとすら所思している。もしかすると、実は私の心の奥底には他の男子にも負けず劣らない淫靡な野獣が息を潜めて眠っているかもしれない。それがいつ目を覚

ますかも分からない。それでも私は思い人以外の裸なんぞ見たくないし、誰かの別れ話も聞きたくない。頭の中がお花畑でいっぱいでも結構。似非ロマンチストでも結構。自分の考え方は曲げたくはない。

しかし、それは私に思い人が見つかったからであり、確実な詳細を求めて吟味する私には遠い未来の話かもしれない。もしかすると次の恋だって『疑似初恋』かもしれない。気付かぬうちに自分自身で己の決意を侵してしまうかもしれない。

しかし、これだけは言っておきたい。ここに記された恋愛への考えは私自身の考えであり、人はそれぞれである。別に私のあり方が正しいとは思っていない。だからこそ、人は別々の異性に思いを寄せる。それはいつの時代だって変わらないし変わってはいけない。ゆえに、今回はこう言おう。

共感八求メナイ。

絶対恋愛吟味主義者の話。(後書き)

最近はこの思考がちょっと変わっていると自分自身、気付き始めていたので少し悲しくもあります。

上田君の話。

これは私が小学校二年生の頃の転校前日に起こった変哲ない友情物語である。人並外れた感受性の持ち主でないとハンカチは必要ないが、ぜひとも最後まで目を通していただきたい。

私にはその頃、上田君という友達がいた。生真面目で軽はずみな様子がなく、成績優秀、優しい面容、律儀な眉毛、一年生になったら友達百人作りましようをただ一人遂行した人間だといえようほどの人脈の持ち主。彼を蔑む者はおらず、また彼も誰も蔑むことはない。優位な立場にたっているにも関わらず遣ること成すこと嫌味に見えず、私のような『無軌道台風』に落ちぶれるような輩もそのインド洋並みの寛大な心で受け入れた。

家が近いということもあり、私達は一年生の頃から登下校を共にする仲だった。

二年生でクラスが変わり、たまにフリールームで遊んでいたりもしたが、しだいに『たすく』や『けんと』のような友達もできて、あまり遊ぶことはなくなっていた。

しかし、そんなある日に私達はさらなる交友を深めた。

それに起因するのは、当時流行していたコマ回しであった。しかもただのコマではない「ごー、しゅーと！」などという掛け声を何の恥ずかしげもなく上げたあとにプラスチックの引き紐を引いてコマを盤上に落とし、それぞれで戦わせるという、ベイゴマ愛好国民の誇りの欠片もないコマ遊びだったのである。しかし、当時はそれが妙に面白かった。

毎日のように上田君のマンションの前で対決をしていた。「今日

も遊ば！」などといちいち聞かず、帰宅してコマを片手に握りしめるとそのまま上田君の家に向かった。居なければそのまま帰り、居れば一緒に遊ぶ。まるで上田君の迷惑をかえりみない遊びであったが、上田君は私が遊びに行くと、忙しそうにしているても快くコマを持ち出してくれた。

しかし、上田君は人気者であったために、たまには他の友達と遊んでいて取り合ってくれない時もあった。初めは「しょうがないな」と流していたが、いつしか上田君は自分から他の友達と遊ぶようになった。それから二人でコマ回ししても、何だか気持ちが入らずに面白くなかった。

そして、あくる日、ついに私の堪忍袋の緒が切れた。

他の友達に先を越されると上田君がそっちに行ってしまうので、私は前々から遊ぼうと約束するようになっていた。しかし、私と約束していたにも関わらずに上田君は友達を自宅に招いて部屋でゲームをしていたのである。マンションの窓から数人の同級生の笑い声が聞こえてきて私はそれを悟った。

私は何だか上田君に見捨てられたかのような気分になって、嫌がらせでインターホンを何度も何度も何度も押した。上田君が出てくると睨みつけて無言で黙った。

今の自分の気持ちを理解して欲しかったが、上田君は私がずっと黙っていると首をかしげて部屋に戻ってしまった。「一緒に遊ぶ？」と誘われたけど、私は頑固に黙っていた。それに一緒に遊んでしまえば自分に負けたような気になるのである。

上田君が部屋に戻るとまたインターホンを何度も何度も押し続けた。「どんな嫌がらせだよ！」と今なら自分に突っ込みたいが、そ

の時の私は切実であった。なぜならば、引越しの話が決まりそうになつていたからであつて、上田君と遊べるのはこれが最後になりそうだったからである。

三度目までは嫌な顔もせず上田君が出てきてくれたが、四度目になると同級生の女の子が出てきた。顔は知っていたけど名前は知らない。

その子是不機嫌そうな顔で私を睨みかえすと「上田君がコマ遊びは飽きたつて！」と告げられた。まるで有罪判決を受けた被告人の気分であつた。その時の私にはとてもショックで、それと同時に怒りに駆られた。

「こんなもん、俺も飽きてたわ！」

片手に持ったコマを上田君のマンション前で叩きつけて放置して歸つた。小学生の知りうる全ての暴言を泣きながら呟き、歸路にいた。

「今度、引越しするからな、そんな遠くないから、友達には会えると思うけど」

歸ると、とどめを刺されるかのようにそう言われた。これから連休だったので、その間に引越すという。

もう上田君とは遊ぶことができない。それどころか会えなくなる。そう思うと妙に後悔の念が襲つてきた。せめて、仲間にいれてもらえばよかったのではないかと。

このまま、終わっちゃいけない。

そう思った瞬間に私の家のインターホンがなった。しかも、一回や二回ではなく、何度も何度も立て続けに鳴った。上田君だと分かった。

部屋を飛び出し廊下を走り、勢いよく玄関を開けた。

すると、一瞬だけ上田君の横顔が見えたが、次の瞬間には逃げて行ってしまった。上田君の遠ざかる足音がひびく、単なる嫌がらせのやり返しと思うかもしれないが、その時の私には違って思えた。上田君はそんなことする人間でないし、私の足元に、マンション前に投げ捨てたはずの自分のコマが回っていたからであろう。

『また、いつか遊ぼう。だから捨てないで、持っていて』

そう上田君の声が聞こえた気がした。泣いた。親に泣き顔を見られたくなかったから、部屋に入るまでは堪えて、部屋に入ったらベツドの上でコマを抱えて泣いた。

やっぱり、上田君は親友である。そう思った。

引越しの作業が思ったより遅れて、連休明けに最後の学校へ行かされて、そこで結局上田君にも会ってしまったけど、言葉は交わさなかった。

それは、次会った時にとっておこうとしたのであろう。

共感求ム。

極会の話。

皆様、極会というものをご存知でしょうか。いいや、知るはずもない。なぜならば極会とは私が創立した『極秘会議』を略したもので、私と私の友達しかその内容を知るものはいないのである。では極会とは何か。

平たく言うのであれば普段の生活にて起こった様々な極秘事項を会員のうちで吐露して共有する会議である。ちなみに、極秘会議で話されたことは、如何なるときも秘密厳守であり、外部の者に告げ口したものは、天空からたらいが落ちてきて見事に頭に直撃して昇天するという決まりになっている。ゆえに私は極会の存在を話すことはできても、その内容を書くことはできない。私だつてたらいで死ぬのは御免である。

ゆえに、私が書けるのはここまでである。読者の皆様申し訳ない。

「短いよ!」

という抗議は受け付けない。どうしても極会の話を書きたかったのである。

しかし、私は思った。読者の皆様はこの文の流れから何を共感するのだろうか。恐らく何も共感できないだろう。そうだろう?

共感求ム。

極会の話。(後書き)

何も共感できないということに共感してください(笑)
極会はまたいつか出てきますので、一応書いときました。

石川先生の話

私は二年生の頃に転校したが、石川先生とはそこで知り合った遊牧騎馬民族並の心を持った破天荒な教師である。まさに前代未聞の教師であり、竹刀を校内で持ち歩き、悪しき生徒を見掛ければささず頭を小突く。学校に必要なものは持つてきてはいけないという不可侵条約をことごとく承諾する。毎日のように同じ服を着ているという教師ならぬ清潔感の欠如。憚りながら私には石川先生が悪魔に見えた。

特に転校初日の昼休みが壮絶であった。いたるところでポケットゲーム、カードゲーム、ボードゲームが繰り広げられ、私は都市学校の現状を目の辺りにしたような気分になった。しかし、話を聞くとところによると、この現状は石川先生なる担任による手引きであるらしく、他のクラスでは行われていないらしい。転校生の初日というのはとにかく歓迎されるもので、男女の隔たりなく色んな所から遊びの誘いが掛かる。私は男子集団にとっ捕まえられてカードゲームをした。学校では落書きか折り紙をしていた女々しい私の純潔なハートが見る見るうちに汚れていくように思えた。その日の晩に母から「学校どうだった？ 担任どんな人？」と訊かれたが私はむやみに答えなかった。

そして、二ヶ月ほど経って私も学校生活に慣れてきた時のことであつた。図書の時間というものがあつて、貴重な一時間をことごとくどぶに捨てて本を読むわけでもなく喋って無益な時間を過ごす授業であつたが、皆ゆとり教育もままならぬ好き勝手なことをしていたので、私も便乗して走り回っていた。友達と鬼ごっこをして本棚を何度も逃げ回り、大声を上げて笑っていた。

すると、遅れてきた石川先生が図書室に入ってきて、鬼ごっこをしている私達を見るなり怒鳴りをあげた。そして、目の前に私達を呼び出し、説教のときは拳で小突くため、もはや使用用途が掴めなかった竹刀をついに振り上げて私達の頭を思いっきり叩いた。私は未だに石川先生の怒りを買ったことがなかったので、少し驚いた。

「お前たちがやって良い事と悪い事を区別できるように 自分の意思で行動できるように自由にしてるのに、これじゃあ、何の意味もないぞ！ 図書室では静かにしないと駄目なんだ！ どんな自由な環境に置かれてもルールだけはやぶっちゃいけないんだよ！」

今まで適当に職員生活を送っていると思っていたから先生のその言葉を聞いて目が潤んだ。本当は教室におもちやは持ってきたらいけないけど、いつか自分達自身がそれに気付いて自己的に持つてくるのをやめるのを石川先生は望んでいた。いつも持ち歩いている竹刀は生徒からプレゼントされたもので嬉しかったから持ち歩いている。貧乏でいつも服が一緒の生徒がいたから、考慮して自分も服を着替えなくなった。それが石川先生の本意であるとのちに知った。

見失っていた本当の自分が戻ってくるようだった。

そして、時は八年後に飛ぶ。

高校一年生の冬。私は『まさ吉』と大手電気家具店へ暇つぶしに来ていた。CDコーナーやGAMEコーナーを見て回り、マッサージチェアでくつろぎ、3Dテレビで一驚し、携帯電話を見てそろそろ帰ろうとなった時である。すぐ横を見覚えのある顔が通った。

「石川先生じゃね？」

まさ吉は苦笑いでそう言った。

対する私は振り返ることができなかった。「多分……」と無表情でうなづく。八年の間会ってなかったので、何だか氣まづかった。すると、まさ吉が思い出すように呟いた。

「確か石川先生って学校辞めさせられたらしいよ。女子生徒に手を出したって」

「ええ！」

「まあ、適当な先生やったけんな。氣まぐれでそういうこととおかしくないわ」

私は黙り込んだ。しかし、石川先生がそんなことをしたというのは信じない。いや、きつとしていないであろう。それか何かの間違いだ。彼は学校で唯一無二の先生であつた。私はあれから沢山の素晴らしい教師に出会つたが生徒のために不必要な物の持ち込み許可をして、生徒のために竹刀を持ち歩き他の教師から敬遠され、生徒のために服を着替えなかつた先生は未だ見ていない。

「多分、間違えじゃないかな」

私はすかした顔でそう言い返した。

気持ちが楽になった氣がして私は振り返つた。

すると、彼が商品棚の一角を曲がるのが見えた。

その手に、竹刀が持たれているような気がした。

共感求ム。

怠情広報委員の話。

私の通っていた小学校では高学年になると委員会へ勧誘される。クラスでも「立候補してくれる人いるかな？」と当時の担任である立川先生が目まぐるしく飛躍しながら勧誘していたのを覚えている。私は『無軌道台風』として完全体になりつつあったが、相変わらず学校では大人しく落ち着いていた。そんなチワワのように非力な私の心に浸け入って立川先生は私を広報委員へといざなった。

初めは首を振った私も、『ダイ君』や『しおっち』や『オーガ』などが委員に入ることを知り、やむを得ず広報委員の肩書きを請けた。広報委員の仕事は校門にある看板に月別で自主制作ポスターを張ることであり、隙あらば落書きを嗜んでいた私に才能を使い道を善導しようと立川先生なりに考えたのかもしれない。

しかし、思惑とは裏腹に私は当初から怠情広報委員であった。

広報委員は男子七名、女子四名で構成されて正いて、門と裏門のポスターが必要になるため二グループに分かれることになった。単純に男子と女子でわかれたのだが、女子は毎回のごとく締め切りを守り、男子は数が多いにも関わらず締め切りに追われる漫画家のような日々を送っていた。なにゆえそうだったのか。

全員に責任があると言えばあるのだが、確実に私の怠情オーラに他のメンバーが影響されたのは言うまでもない。

ここまでが経緯であり、共感求む話はここからである。

むやみにポスター作りに参加することを拒んできた私だが、なぜか別グループの女子にちょっかいを出していた。もしも、当時の自分がそこにいるのなら腹を抱えて四階の窓から放り捨ててしまいたい。しかし、無軌道台風であった私は何の躊躇もなく『怪物油魔物』とあだ名をつけたり、作品のアイディアを盗み見て見事に模写したり、教室で暴れたりした。

そして、広報委員の話は『ダイ君の恋』へと続き、私の女子へのちょっかいは『アンドレの逆襲』へと続く。

さてさて、皆様。私はこのことを多大に後悔している。なぜ自分から嫌われるような所業の数々に手を染めたのか。今でも理由は解明されていない。

他にも幼少の頃に女子にちょっかいを出して後悔した人はいないであろうか？

共感求ム。

未確認飛行物体的即席麵の話。(前書き)

最近はまともな共感を求めていなかったなので(笑)

未確認飛行物体的即席麺の話。

この話をしっかりと理解していただく為には、まずタイトルを理解してもらわねばならない。きつと、「うわ、なげえタイトルだな見るの面倒くさ」などと言って曖昧に流し目で見た人が多いであろう。凝視するべし。

未確認飛行物体的即席麺が理解できた方はこの先を読んでいただきたい。

私は並外れた怠惰な男であるため、未確認飛行物体的即席麺の存在を大いに頼ることがしばしばある。たまに貯蔵を怠って蓄えがなかったり、気分転換しなかったりするときは浮気を試みるも到底しつくりこない。やはり帰するところは未確認飛行物体的即席麺なのである。あの本物とはかけ離れた濃い味付けが忘れられないのである。

しかし、未確認飛行物体的即席麺は詮ずる所とても健康に多大な悪影響を及ぼす食べ物であり、食べすぎると抜け毛、頭痛、猫背、腰痛などを引き起こす可能性がある。ただし、これは私の独断と偏見と誤認と横暴から導き出された結果であり、確証は未だに得られていないので、ご注意ください。

そこで、今回の共感求む話というのが、未確認飛行物体的即席麺の排水作業での出来事である。

よし、ここはもったいぶらずに言ってしまうおう。

あの湯気は、いい匂いではないか！

どこか香ばしくて、そのまま排水溝に流すのがもったいなく感じ
てしまう。

一度、よく嗅いでみることをお勧めするが、決してキッチンでぬ
るま湯につかったようなほころびを住人に目撃されないように細心
の注意をはらっていたきたい。

共感求ム。

アンドレの逆襲の話

この話は私が小学校五年生で、転校先の学校にも慣れてきた頃のことである。

私は『無軌道台風』という異名を負っていたが、学校ではさぞかし落ち着いたようすで雨に打たれた子犬のような奴だと周りから言われていた。しかし、やはり『無軌道台風』と呼ばれた私が子犬で小学校生活を締めるのは潔しとしない。そろそろひと吹きしてやるのかな。などと企てていた時期のことである。

怠惰広報委員であつた私は女子にちよっかいを出していた。

ただ、あまり直結に言うとは読者様から見た私のイメージが悪くなり、せつかくの小説達が廃れてしまう一方であるので、ちよっかいの内容を私による判断から構成・編集・さらなる編集・さらにさらなる編集を加えたうえでここに記す。

一番多かつたちよっかいは勝手に作つたあだ名である。

名前というのは一つの生命につけられた貴いものであり、その人がその人である証しであり、決して汚してはいけないものである。それに関わらず私は「怪油魔」や「ひよろつぱ」に始まり、「アンドレ」から「休む松ノ木」これはあだ名じゃないけど などのあだ名を作つては公言し、ことごとく名前を汚した。

そんな不毛で無益なことをして誰も得をする者はおらず、かえって女子に煙たがれるだけであつた。しかし、当時の私には不名誉こそが最大の名誉であり、『勝手にあだ名付け』は無軌道台風の名を

さらに轟かせる所業となった。

これは私にあだ名をつけられて唇を噛み締めていた『アンドレ』が突如に起こした逆襲なるものである。

あれは、放課後のグラウンドであった。

私はしおっちと遊具で遊んでいたが、そこにアンドレとひよろっぱがやってきた。

アンドレとはかの有名なプロレスラーのことをさし、彼女が平均に比べ長身の女性であったからつけたあだ名であった。

私としおちは案の定アンドレに「やーい、アンドレがきた！」などと言ってちょっかいを出した。

すると、いつもは黙って睨んでくるのに今回は「また馬鹿にしてえ」となぜか嬉しそうに愛想を振りまいた。おそらく何か得体の知れない病原菌に身体を蝕まれているのだと思ったが、この話は『知らぬ間に恋のキューピット』へと続く。

しかし、その時の私は、何だかちょっかいを出したのに軽くあしらわれてちょっかいを出したという気がせず、気分が悪くなった。

ゆえに、ここには記せないような酷いことまで口に出してしまったのである。しかし、あえて記すなら「ブサイク」だとか「まぬけ」だったわけである。もしも、当時の私がそこにいたのなら四階の窓から放り投げたいぐらいなのだが、その時はやんちゃな盛りだったのであるう。

すると、愛想が良かったはずの彼女は突然に涙目になるとグラウ

ンドの砂を私に向かって投げつけてきたのである。投げられた砂は顔に掛かり、髪に掛かり、服のなかに掛かり、くつのなかに掛かった。しかも、本気で投げつけるので肌に痛い。

私はそこでやっと反省したのかもしれない。

ただ、その時の私には彼女が怒った理由が分からなかった。しかし、のちに分かることになる。やっぱりそれは『知らぬ間に恋のキューピット』の話を見ないと分からない。何だか『知らぬ間に恋のキューピット』を見ないと理解できないような話で申し訳ない。

長くなってしまったので、今回の共感求む話は一文に任せる。

髪の中に砂が入っている感触というのは、はなはだ気持ち悪い。

以上である。

共感求ム。

鉄ペラの世界的権威の話。(前書き)

もはや、暇つぶしになっている。

しかし、そのわりには引用などとむくつけき行動をしているらしいが、これいかに。

鉄ベラの世界的権威の話。

まず、言っておかなければならないことが二つある。一つは、私
が関西人でないこと。もう一つは、これを見た関西人の方々への切
実なお願いであり、私をどうか許してやって欲しいということであ
る。

私は現在鉄ベラの世界的権威をしている。ヘラとは元液状現半固
体物質の平々たる粉物料理を裏返したりする調理道具である。私の
むくつけき解説に理解を要さなかった読者はただちに検索すること
をお勧めする。

私は鉄ベラの世界的権威として、キベラ怪獣やゴムベラ妖怪など
と日々決闘をしたり、いびつな形をした平々たる粉物料理を裏返し
てと依頼を受けたり、お菓子が欲しいと駄々をこねる子供の頭を鉄
ベラで叩いたりしていた。

私の手中に収められた鉄ベラはたちまち虹色に輝き、持ち味を遥
かに凌駕した持ち味をしたたらせた。私の手で返された光沢を放つ
平々たる粉物料理を見て数々の美食家がむせび泣いたに違いない。
(風呂場の話より引用)

しかし、これ以上自己誇張すると後に收拾がつかなくなるので、
ここらで正直に話しておく。

最近、私は母親に「お父さんがいないから、あなたがやってちょ
うだい」とヘラを渡された。そして、目の前に出されたのはじうじ
うと音を立てる平々たる粉物料理。私は固唾を呑んだ。

私には初めての体験であったが、思ったよりもうまくいった。怒られたのは「ヘラで押さえつけては駄目でしょう」というもので、それを抜けばおよそ満点といえる。

つまりは、自惚れたわけである。

関西の平々たる粉物料理ふぁんの皆様方。

申し訳ありません。

共感求ム。

似非健康半袖少年の話

私は小学二年生の終わりから小学六年生まで、知らない人も知っている『似非健康半袖少年』であった。子供は風の子だからよく外で遊べというが、さすがに冬が到来すれば着込んで寒さをやり過ごす。冬に駆け回ることといえば、雪が降った時ぐらいである。

しかし、私ははばかりも年中半袖であった。鼻水垂らし、寒気に身体を震えさせながらも半袖であった。石川先生などには「俺も半袖で行こうか？」などと同情されて、そこで石川先生の真意を知ったりもしたのだが、別に家に長袖の洋服がないわけではない。理由はさだかではないが、私は半袖だったのである。

なにゆえ、そんな無益なことを吐露するのかというと、小学校の卒業アルバムの集合写真を見てみたのだが、季節に隔てなく私だけ半袖であった。それがつつい面白くて書いてしまったのだが、この半袖の裏には薄い布生地に不釣り合いなほどのエピソードが込められているのである。

それは私が小学五年生の頃のこと、すでにクラスでは私が似非健康半袖少年だと知る者も少なくはなかった。

「おい、俺とお前さあ。どっちが長く半袖でいられるか勝負しようぜ」

そう持ちかけてきたのは少年野球部に身を置く健康半袖少年の『ひっくー』であった。

彼も私と同じく半袖愛好家であったが、私のように晩年半袖野郎に成り下がるような人間でなかったし、とても容姿が格好良かった。

「いえいえ、わたくしと勝負だなんてとんでもございません」まがいの発言をして勝負を逃げ出そうとした記憶がある。なぜならば、万が一私が勝負に勝ってひっくーの顔の泥を塗るようなことをすれば、ひっくーファンにのたまわされるからである。

さて、ここで共感求む話といいますが、極限的にどうでもよいことなのですが、私の友達には何かしら格好良い人間が集まっているのです。今作品に出てきた中だけで『トレイン』『まさ吉』『しおっち』『上田君』『ひっくー』などなど、みんな容姿がいいです。

もしかしたら「こいつの作品にはよくイケメンが出てくるな」と思った人間がいるかもしれないので、無理やりつなげてみた。

共感求ム。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7246v/>

共感求ム。

2011年10月6日17時59分発行